

## 第二回昭和女子大学児童文学賞選考結果

昨年に創設された昭和女子大学児童文学賞は、若いみなさんにぜひ文学に親しんでいただきたいとの思いから、「あなたの夢や想いを童話というスタイルで表現してみませんか？」というキャッチフレーズのもと、全国の高校生を対象に、フレッシュな創作児童文学を募集しました。

選考委員は、坂東真理子(昭和女子大学長)・茅場康雄(同日本語日本文学科長)・西本鶏介(同名誉教授・児童文学作家)・石井直人(同非常勤講師・白百合女子大学教授)・堀直子(児童文学作家)の5名です。

第一次および第二次選考委員会を経て、最優秀賞は該当なし、優秀賞に真殿菜摘「知音のお手紙人形さん」、岸本菜緒子「貝がらと王子さま」の2作を決定しました。

選評 選考委員 西本鶏介先生

選考を終えて

いささか表現が未熟であっても若者らしい自由奔放な発想の作品を書いてほしいものです。残念ながら今回も最優秀賞にふさわしい作品はありませんでしたが、優秀賞として二つの作品を選ぶことができました。いずれの作品も独自の世界を描こうとしています。

『知音のお手紙人形さん』は語り手の「僕」が自分の創ったお話の中の郵便屋さんに出会うという風変わりな童話です。彼の名前はお手紙人形、緑の制服と帽子を身につけ、高いフェンスの上に立って手紙をまき散らすところから「僕」を妹の意識の中にある自宅まで連れていく導入部が読み手の期待感をふくらませてくれます。しかし、物語の中の人物がなぜ実在しているのかという表現方法へのこだわりが目立ち、肝心のストーリーが弱いように思います。手紙から幸福をもらうよろこびはわかるとしても、妹との仲なおりが目的ではせつかく

のお手紙人形も役不足になってしまいます。妹だけでなく、さまざまな人たちに幸せを配るようなドラマを考えてください。むだのない文章には好感を持てますが、誤字が気になりました。

『貝がらと王子さま』は応募作の中ではもっとも童話らしい作品で、幼い子どもにも楽しく読むことができます。この島にはナイフとフォークがあるのになぜスプーンがないのかふしぎな気もしますが、フォークでとけたアイスクリームを食べるもどかしさは幼児ならではの感性で、ユーモラスな王子さまの成長物語として説得力があります。魔女が出るという西の海岸で、おばあさんに出会い、海の向うにいくつもの大きな島があることを知る場面など、お話づくりもたくみです。スプーンがわりの二枚貝の貝がらをもらうところはスプーンがなくて家出したのですから、もう少しドラマチックにふくらませてほしいと思いました。とりたててめずらしくもない王さまと王子さまを素材にしながらも魅力的なお話にしあげていることに拍手をおくります。

選評 選考委員 石井直人先生

児童文学といっても、実は、いろいろなタイプがあります。第二回の応募作も、童話やファンタジーばかりでなく、安部公房ばりのシュールな短編や子どもの日常生活にこの時代の生命倫理をこめた短編など、いろいろなタイプがありました。入選に至らなかったものの、「赤いもの」と「マグロのゆうれい」の二つは、ユニークなものでした。

「貝がらと王子さま」は、こんなになめらかに読めるものは、他にありませんでした。とにかく、文章が心地よい。呼吸というか、リズムというか、文章の始まりと終わりのタイミング、それが過不足のない感じでした。ストーリー面でいうと、この後、王子は、どんな冒険に船出するのだろうか、さて？ という感じで、物語の予感のまま終わってしまった感があります。枚数制限もありますが、世界設定として、では、この人々は、かつてなにゆえにこの島に渡海して来たのか？とか、詰められていない余白があるのではないのでしょうか。王子と魔女（じゃない）の出会いは、その雰囲気やはり心地よい、です。

「知音とお手紙人形さん」は、正統派のメルヘンだと思います。兄と妹、その成長にともなう行き違いとそれでもお互いを気遣う思いと、いずれもよくわかるものです。実生活では、行き違い、そのまま別々の人生を歩んでいったのであった(終)、ということもありうるかもしれませんが、このお話では、お手紙人形のおかげで、二人は過去にさかのぼってもう一度思い直すことができるのでした。もちろん、それだけのやさしいお話ではありません。お手紙人形が人形町という名前だということやその人形が主人公を父上と呼ぶことなど、ちょっと奇妙な味わいがあるのです。その中の一つ、さながら花吹雪のごとく、夕闇に降り落ちる手紙の紙吹雪の彩は、作者がいちばん書きたかった光景なのかもしれません。そういう味わいがストーリーを豊かなものにしてきている、と思いました。

選評 選考委員 堀 直子先生

今回始めて創作者の立場から、この選考委員会に出席させていただきました。まず、「知音のお手紙人形さん」から。人形町となのるこの奇妙なお手紙人形さんって、いったい何？人間なの？人形なの？それともモンスター？実際は主人公僕の想像上の人物である、まるでスナフキンみたいに、クールで孤独、かつ、礼儀正しく心やさしい彼。彼の出現によって、黄昏れどきのちょっとあやしい時間のなかで、僕の幸せさがしが、はじまるのですが、物語の出だしといい、なかなか雰囲気のある作品だと思いました。

ただ、兄と妹の関係って、だいたい「仲は、悪くはないが、良い方でもない」ものだと思う。じゃあ、僕がどうして、妹と仲直りしたいのか、その本音にかかわる事件っていったい何だったのか、すごく知りたくなってしまいました。

「貝がらと王子さま」は、やわらかな素直な文体に、抵抗なくはいっていけました。アイスクリームやプリンに魔女なんて、子どもが喜びそうなものが満載ですね。小さな王子さまの、おとなになるための(大きな正しいかんむりをもたらすための)冒険の幕開けが、やさしい口調で書かれていて楽しかったです。私はこのお話、ナンセンスで、ずっと最後までいくのかなと思いました。だっ

て、スプーンを使わない国なんですものね。でも、ハンバーグは食べる？そのときスープもでるでしょう。スープはいったいどうやって、飲むの？そのへんがわからなかったけど、このナンセンス、いったいどんなオチがつくのかなと思ったら、意外や意外で、王子さまの成長物語となっていました。

でも、かわいい王子さまだから、きっとイケメン王子になって、この島へもどってくるんだらうなって思ったら、それもありですね。イケメン王子の新たな冒険を、もう一度読んでみたいです。そして魔女（魔女にはきれいな娘がいるかも。でも、性格は悪いとか）との再会もね。